

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和8年4月14日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立小山小学校

1 定着状況についての概要 平均正答率が、2年生から6年生まで全学年が、目標値を上回り、良好であった。2年生は8.0ポイント、3年生は10.1ポイント、4年生は11.6ポイント、5年生は7.3ポイント、6年生は7.7ポイント目標値を上回った。 しかし、領域別に見ると、3年生「情報の取り扱い方に関する事項」が6.5ポイント、6年生「言葉の特徴や使い方に関する事項」が0.2ポイント、目標値を下回っていた。
2 具体的な課題（目標値から下回っている内容） 【2年生】聞いたことをもとに話をする 文章を書く 【3年生】言葉の学習 【4年生】言葉の学習 【5年生】漢字を書く 【6年生】漢字を書く
3 課題の原因として考えられること ○「文章を書く」では、低学年で目標値を下回った。タブレットを使用する機会が増えていることも要因の一つと考えられる。 ○4年生の言葉の学習では「ローマ字」の読みが正しく出来ていなかった。国語科で指導する「ローマ字」の学習時間が年間で4時間と短いことが要因である。 ○「漢字」については、「ことのは」「小山検定」などを活用し継続指導した結果、改善がみられたものの、高学年で目標値を下回った。「覚める」「境」「破る」等の訓読みの漢字を書く正答率が低かったことから語彙力の低下が課題と思われる。
4 課題解決のための方策(取組指標) 重点的に実施する手立てを明確にし、「何を、いつまでに、どうするのか」を具体的に説明する ○低学年では、連絡帳の記入や日記の指導など、書く機会を増やし、書くことへの抵抗感を減らす。また、日記などの学習活動を工夫して、楽しみながら表現する喜びを味わわせるように指導していく。 ○3年生の「ローマ字」の学習時間が4時間と短いことから、国語科の授業時間内で50音、濁音、半濁音のアルファベットの書き方を教え、さらに「hon`ya」（ほんや）「rakko」（らっこ）など表記の仕方の理解を深めることまでは難しい。そのため、宿題（家庭学習）やローマ字入力によるタイピングソフトなどICTも活用してローマ字を身に付けていく。 ○「訓読み」の漢字を書くことが課題と言える。漢字指導の中で「漢字を使った短文作り」などを取り入れ、日常化していく。また、毎週「読書」の時間を確保し、語彙を豊かにしていく。

令和8年度「品川学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（社会科）

1 定着状況についての概要
4年生と5年生の平均正答率は、目標値を上回ることができた。6年生は目標値を下回ったが、1ポイント未満で、大きく課題があるわけではない。6年生に関しては、日本の水産業の内容においてわずかに正答率が低く、正確に資料を読み取ることに關しての課題が見られた。
2 具体的な課題（目標値から下回っている内容）
【5年生】自然災害からくらしを守る—地震 【6年生】日本の水産業
3 課題の原因として考えられること
【5年生】 「自然災害からくらしを守る」では、災害の種類や防災・減災の取組を個別に理解するだけでなく、自然条件と人々の暮らし、防災対策との関連を総合的に捉えることに課題が見られた。また、資料を基に必要な情報を整理し、自分の考えを説明する問題で正答率が伸び悩んだ。 【6年生】 「日本の水産業」においては、特定の資料やデータから必要な情報を読み取る問題の正答率が低く、目標値を下回った。また、複数の資料を関連付けて比較・分析する問題や、その内容の根拠を示して説明する記述問題では無回答が多く、資料を活用して自分の考えを表現する力に課題が見られた。
4 課題解決のための方策(取組指標)
重点的に実施する手立てを明確にし、「何を、いつまでに、どうするのか」を具体的に説明する 資料を活用して考察する力を高めるため、資料の見方や比較の視点を明確にし、事実の読み取りから関連付け、考察、記述へと段階的に指導する。また、記述の型やキーワードを示すなど、児童が自分の考えを書きやすくなるような支援を行う。短時間の資料の読み取りや記述活動を日常的に取り入れるとともに、地域や生活に関わる資料を活用し、学習内容を身近な問題として捉えさせる。単元途中の評価からつまづきを把握し、補充指導や授業改善につなげていく。 【5年生】 ・ハザードマップや雨量・地形図、防災資料など複数の資料を活用し、自然条件と防災対策との関係を考察する学習を充実させる。 ・地域の防災について話し合ったり、自分たちの生活と関連付けて考えたりする活動を取り入れ、学習内容を身近な課題として捉えられるようにする。 ・「資料から分かること」「その理由」「自分ならどう行動するか」を記述する機会を継続的に設け、根拠をもって説明する力を育成する。 【6年生】 ・グラフ、地図、写真、統計資料など複数の資料を関連付けて考察する学習活動を継続的に取り入れる。 ・「資料から分かること」「その理由」をペアやグループで説明し合う活動を充実させ、根拠を基に考える力を育成する。 ・記述問題に日常的に取り組み、「資料の〇〇から分かる」「〇〇と考えられる」といった表現を繰り返して指導し、自分の考えを文章でまとめる力を育成する。

1 定着状況についての概要
平均正答率については3年生が目標値にわずか0.1ポイント及ばなかったものの、2年生は7.5ポイント、4年生は9.4ポイント、5年生は8.2ポイント、6年生は9.5ポイント目標値を上回り、全体的には、良好であった。
2 具体的な課題（目標値から下回っている内容）
【2年生】なし 【3年生】たし算・ひき算、長さ、三角形と四角形 【4年生】大きい数・小数・分数、長さ・重さ 【5年生】面積、図形 【6年生】小数の計算、多角形と円・合同、比例・単位量あたりの大きさ
3 課題の原因として考えられること
○3年生では、2年生で習得した九九は目標値を上回ったが、繰り上がり・繰り下がりのある計算の正答率が低かった。2年生の後半、授業開始5分程度九九の復習の時間は設けていたが、たし算・ひき算の復習時間は少なかったことが要因であると考ええる。また、下位層の児童数名が、複数の問題に対して無回答であったため、3年生全体の正答率低下に影響があった。 ○4年生は、位取り表の理解が不十分であった。扱う数が大きくなり、位に対する「0」の数を正確に読み取ることや書き取ることが苦手な児童が多かったことが原因であると考ええる。また、「長さ」では、道のりと距離の語意を正しく理解していないことで、正しい数値を求めることができなかった。 ○5年生・6年生では、共に図形の作図が目標値を下回っていた。定規やコンパスなどの算数教具の正しい使用方法が身に付いていない児童が多いことが、推測される。 ○6年生は、比例・単位量あたりの大きさでは、表から数値を読み取ってから人口密度を求めるなど、解答を求めるまでの工程が多い問題で正答率が低いことが課題となった。
4 課題解決のための方策(取組指標)
重点的に実施する手立てを明確にし、「何を、いつまでに、どうするのか」を具体的に説明する ○確実な計算力を身に付けられるよう、教科書の問題だけでなく、計算ドリルやミライシードなどを活用し、家庭学習や授業時間内で繰り返し学習する機会を設ける。また、学級指導、習熟度別少人数指導では、クラスの実態に応じて、開始時に100マス計算に取り組むなど、計算力の向上を目指す。 ○図形の単元では、作図が正確にできるように、算数教具（コンパスや三角定規など）の正しい使い方について、毎時間確認する。また、作図の基本である長方形・正方形・円・平行四辺形・多角形の問題だけでなく、児童が興味のある図形（動物の形や乗り物など）を用意し、意欲的に作図に取り組む活動を設定する。 ○3年生以上の学年では、習熟度別少人数算数指導を実施しているので、習熟度に合わせて興味関心が維持できるよう、授業内容や問題・プリントを用意し、基礎・基本の確実な定着を図り、自信をもてるようにしていく。

1 定着状況についての概要
平均正答率は、4年生から6年生まで全学年で、良好な状況であった。4年生は9ポイント、5年生は10ポイント、6年生は4ポイントそれぞれ目標値を上回った。ただし問題内容別で見ると、4年生は下回った問題が2つ、5年生は3つ、6年生は4つという結果であった。
2 具体的な課題（目標値から下回っている内容）
【4年生】昆虫の育ち方 身近なしぜんのかんさつ 【5年生】天気のようにすと気温 雨水のゆくえと地面のようす 自然の中の水 【6年生】顕微鏡の使い方 ふりこのきまり 流れる水のはたらき 電流のはたらき
3 課題の原因として考えられること
【4年生】 ○虫眼鏡の使い方や完全変態と不完全変態の昆虫についての問題の正答率が低くなっている。授業中に一括して説明するだけで、児童一人一人が実際に手に取り、正しく使えるかを個別評価・指導する時間が十分に確保できていなかったと考えられる。 【5年生】 ○気温を測る条件や百葉箱の構造の意図についての理解が浅かった。「粒が大きい（砂）＝しみ込みやすい」「粒が小さい（土）＝しみみにくい」という相関関係の理解や、実験結果の根拠を基に整理・記述する思考が不十分であった。冷やされた際に空気中の水蒸気が水に変わる「結露」という現象の名称や仕組みの理解が不十分であった。「蒸発」など他の状態変化と混同したり、身近な事象と結び付けて定着させたりする場面が少なかった。 【6年生】 ○全体説明にとどまり、反射鏡の調整やピント合わせの手順を一人一人が正しくできるかの個別の見取り・技能評価が不足していた。実験結果の数値データから関係性を読み取ったり、変化を推測したりする数学的・論理的思考の指導が不足していた。「運搬」「電磁石の強さ」などの科学的概念が用語の丸暗記にとどまり、モデル実験の理解や具体的な現象と結び付いていない。
4 課題解決のための方策(取組指標)
重点的に実施する手立てを明確にし、「何を、いつまでに、どうするのか」を具体的に説明する
【4年生】 ○観察前に「虫眼鏡を目につける・観察物を動かす・太陽を見ない」の基本3ステップをペアで確認する。理科の時間だけでなく、日常の自然観察の機会を捉えて個別に指導・評価を行う。 ○昆虫カードを使って「さなぎになる仲間/ならない仲間」を分類する体験的なアクティビティを取り入れる。教室内に育ちの違いを対比した図表を掲示し、日常的に意識化を図る。 【5年生】 ○棒温度計を使い、日なた・日かげ・高さごとの温度差を比較測定させることで「なぜその条件が必要か」を実感させる。 ○砂と土の隙間の違いについて、模式図などを用いて見せ、水が通過する仕組みを視覚的に理解させる。 ○氷水のコップや窓ガラスのくもりなど身近な事象を扱い、「水滴がどこから来たのか」粒子モデル等を用いて視覚的に解説・定着させる。 【6年生】 ○プレパラートの準備からピント合わせまでを全員が一人で完了させる「個別チェックタイム」を設ける。 ○測定データやグラフにまとめさせ、「長さが変わると時間はどう変化するか」を読み取らせる活動を取り入れる。 ○発展的な問いを投げかけ、結果を予測して検証させるプロセスを組み込む。 ○動画教材やモデル観察を活用し、浸食・運搬・堆積の様子や電流の強さによる変化を視覚的に捉え直させる。

1 定着状況についての概要
6年生（英語）の平均正答率は、目標値を11.8ポイント上回り、良好な状況であった。
2 具体的な課題（目標値から下回っている内容）
目標値を下回ったものは、「日常会話の理解（聞く）」であった。 日常会話の内容は、スポーツを行う場所についてであった。
3 課題の原因として考えられること
gym, court, track, pool などの場所を表す語彙や日常会話の機会の不足、in, at, on などの前置詞や位置関係の聞き逃しが考えられる。
4 課題解決のための方策(取組指標)
重点的に実施する手立てを明確にし、「何を、いつまでに、どうするのか」を具体的に説明する
○英語を使ったプロジェクトや活動 学習アプリ「ミライシード」を活用して、自主学習やリスニング・リーディングのスキル向上を目指す。授業内で、英語学習ゲームや音声教材を活用することで、児童が自分の技量に合わせて学ぶことができるようにする。
○対話を通した意味の理解 児童同士が簡単な英語で対話を繰り返すことで、語句の意味を理解させる。正答率が目標値を下回った「場所」についての会話を「Where is～？」のフレーズを含めて、1～2往復程度で短く行うようにし、場所に関する会話に慣れることができるようにする。
○音声との組み合わせ アルファベットの発音と文字の結びつきを強化するために、音声教材や録音を活用した学習を行う。